化粧（中）

渡辺淳一

新潮文庫

化粧（中）

新潮文庫　わ-1-11

昭和六十年八月二十五日　発行
昭和六十一年三月十五日　五刷

著者　渡辺淳一

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六一五一一一
編集部（〇三）二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊐ 印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Jun'ichi Watanabe 1982　Printed in Japan

ISBN4-10-117611-6 C0193

新潮文庫

化粧

中卷

渡辺淳一著

新潮社版

3449

化

粧

中卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

落葉の章

例年、京都の紅葉は十一月の初めが見頃である。

だが今年はいつになく遅れて、山峡では十一月に入っても色づいているところはほとんどない。

もっとも紅葉は急激に寒さがきたときのほうが美しい。その点からいうと、今年の紅葉はいくらか色艶に欠けるかもしれない。

しかし松の緑と銀杏の黄に並んだ紅は、また、一段と鮮やかである。とくに京都の紅葉は小さく切れこみの細やかな一乗寺紅葉が中心である。それが秋の陽を受けて、葉脈の先まで透ける美しさは、まさに日本の美の典型である。

十月の末に椎名から電話があったとき、里子は「そろそろ紅葉の季節ですから、お見えになりませんか」と誘ってみた。一度、軀を許した女から来て欲しいというのははばかられて、紅葉に託していってみたのである。

「いいでしょうね、京都の紅葉は……」

椎名はそういったまま、行くとも行かないともいわなかった。
行く、といえないのは、余程忙しいのであろう。暇があるのなら、きっと来てくれるはずだ、里子はそう思って、それ以上誘わなかった。
だが紅葉は十一月に入っても、一向に色づかなかった。
十一月の料理には一品くらい、皿の端に紅葉を添えるが、その葉がないといって板前が二人、高雄のほうへ探しに行った。
だが槇尾から栂尾のほうまで行っても恰好なのがなく、結局、花背まで行って採ってきたという。
里子は、椎名を無理に誘わなくてよかったと思った。
紅葉もないのに呼んで、逢瀬を重ねては、ただ淫らな女に思われてしまう。
毎年十一月の第二日曜日に嵐山でおこなわれる「もみじ祭り」も、今年は緑のなかに紅葉がわずかで、精彩がなかったときいた。
だが、それから一週間経ち、冷えこむ日が数日続いて、紅葉は急速に色づきはじめた。
蔦乃家の庭もやや褪せた緑に変わって、朱が三分の一を占めてきた。里子はそのなかの最も色の鮮やかなのを三葉拾い、封書にいれて椎名へ手紙を出した。
〈ようやく紅葉の季節になりました。今朝、庭で拾ったのです。一人で楽しむのはもったいなくて、お送りすることにしました。里子〉
いろいろ書いたり、消したりしたが、結局これだけになった。

それ以上は書いてもうまく表せないし、嘘になるような気もした。
宛先は椎名の会社にして、差出人のところへは蔦乃家のゴム印だけ捺した。
送った四日後に椎名から電話があった。
「とても嬉しかった。あの葉を大切に手帖のあいだにはさんでいます」
そういったあと、
「来週でも、紅葉は見られるでしょうか」
「大丈夫だと思います。お見えになれますか」
「水曜日に大阪で会議があります。それに出てそのあと、京都へまわろうかと思います」
「ほんまに、来てくれはるのどすか」
「あなたの送ってくれた紅葉を見ているうちに、ぜひ行ってみたくなったのです」
「紅葉を送らへんかったら、来はらへんとこどしたん？」
「そんなことはありません、行きたいという気持はいつも同じです」
「ほな、水曜日の夜にお着きになるのどすね」
「会議が終わるのは八時ごろなので、そちらに着くのは十時ごろになるかもしれません。そのまま、まっすぐホテルに行きますが、あなたはその日は」
里子は一瞬、戸惑ってから、「かましまへん」と答えた。
「もちろん、紅葉は次の日に見ることになります。一時ごろの新幹線に乗らなければならないので、午前中だけであまり遠くへは行けないと思うのですが」

「東山の近くでもええところはあります。お見えになるまでに探しておきます。いつものホテルでよろしいですね」
「十時までには着くと思いますが、途中から電話でもしましょうか」
「たしかにお出でになるのどしたら、ホテルのロビーでお待ちします」
答えながら、里子は自分が紅葉のように朱を帯びていくのを感じていた。

椎名から電話のときは、簡単に大丈夫だと答えたが、一週間経って水曜日になると、紅葉は少し散りかけていた。
もっとも終わりのころのほうが朱はいっそう鮮やかである。
ただ銀杏の黄色い葉が先に落ちるため、色の対照の面白さは薄れてしまう。
どこへ案内したものか、里子はいろいろ考えてみたが、時間がかぎられているだけに難しい。
簡単に紅葉の名所といえば、高雄の神護寺のあたりから、槇尾の西明寺、さらに栂尾の高山寺ということになるかもしれない。洛北のほうなら、大原の三千院から寂光院といったところも考えられる。
だがそれらのコースは有名すぎて、平日でもかなりの人が訪れそうだし、遠すぎるかもしれない。
近いところといえば、岡崎の永観堂とか清水寺の紅葉も美しいが、前者はやはり人が多い

し、後者は実家に近すぎる。

せっかく椎名と紅葉を見るなら、人目の少ないところでじっくりと見たい。嵯峨野の祇王寺や小倉山一帯も悪くはないが、意外に人が来そうである。

迷った末、里子は鷹ケ峰の光悦寺と修学院の先の蓮華寺を考えた。この二つは紅葉はもちろん美しいし、比較的ひっそりとしている。それに距離もそう遠くはない。光悦垣に映える楓紅葉の華やかさなら光悦寺だし、ひそやかな静けさを求めるなら蓮華寺がいい。

それは椎名と会ってから決めればいいことである。

水曜日の夜は珍しく宴席が少なく、三つの座敷がつかわれているだけだった。

お座敷が暇なほうが出やすいのは当然だが、反面、客の数が少なくて、外出する口実をつくりにくい面もある。

前に椎名と逢った夜、遅く帰ってきてから、母のつねは里子の行動を警戒するようになっていた。言葉でこそはっきりいわないが、注意しているのが態度でわかる。

実際、遅く帰ってきた翌朝、無断で家を出て昼過ぎに戻ってきたのだから、おかしいと思うのも無理はない。

夫の菊雄ならなんとか誤魔化せるが、同性の母は難しい。

ともかく今度も椎名の名をつかうのでは、いよいよ怪しまれるだけである。

考えた末、今度も千鶴に頼むことにした。

「かまへんえ、そやけどただ逢うたはるだけどっしゃろね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

里子の真剣な表情に、千鶴は少し不安になってきたらしい。
だが千鶴の客に一緒に呼ばれて飲むという理由で、母にいってみた。
お座敷の時間が終わる九時過ぎからの外出なので、母は思ったより簡単に許してくれたが、
「早う、帰ってきよし」と、一言念をおすことも忘れない。
九時半に、里子は呼んであった車に乗ってホテルへ向かった。今日は初めから椎名に会うことを考えて、淡い紫の古代紬に薄い黄色の帯を締めた。
どういうわけか、里子は椎名と会うときには、つい地味な柄を選んでしまう。派手なものが似合わないわけでもないが、忍ぶ気持がつい、着物の上にも出てしまうのかもしれない。
ホテルに着き、フロントを過ぎて、左手のロビーへ行くと、椎名がソファに坐って煙草を喫っていた。
今日は会議のせいか、グレイのスーツを着てネクタイを締めている。
「お待ちにならはりました」
「いや、いま着いたところです」
椎名は喫いかけの煙草を、白い小石のなかにもみ消すと、エレベーターのほうへ向かいながら、
「なにか飲みますか」
「いえ……」
すぐエレベーターが開いて、二人が乗ると、続いて外人の夫婦連れらしい客が乗りこんで

きた。
「京都は意外にあたたかいので驚きました」
「この二、三日、またちょっと陽気がようなりました」
答えながら、里子はいま自分が椎名の部屋に向かっているのに気がついた。
以前ならこんな大胆なことはしなかった。会えばまず食事かお酒を飲み、話をしていた。だがいまは、横にいる外人夫婦が邪魔なほど、二人だけになりたいと願っている。
やがてエレベーターが五階で止まり、廊下へ出る。左手へ二十メートルほどいったところが椎名の部屋だった。
椎名はポケットから鍵を出し、ドアを開ける。
「さあ」と目で促されて、里子もなかへ入る。
部屋はダブルで、ベッドと反対側のテーブルにスタンドが一つ点いている。
里子がそれを見て、立ち竦んでいると、椎名がドアを閉め、いきなり里子を抱きしめた。
「逢いたかった」
「うちも……」
つぶやくと、里子はもうなにも考えず、自分から唇をさし出した。
今度も、目覚めは遠く野の果てから、微風にでものったように舞い戻ってくる。満たされた余韻はかぎりなく優しく、気怠げで、少しもの惜しげでもある。

このまま指一つ動かさず、全身の力を抜きとられたまま、椎名の側に横たわっていたい。だがそんな時間がいつまでも続くわけはない。

目を閉じながらも、里子はいまも時間が刻々と過ぎていくのを感じていた。

何時なのか、ききたいがきくのが怖い。もしかして大分遅くなっているのではないか、それを案じながら怖くてきけない。

やがて椎名が、里子の肩の下になっていた腕を引き、向きなおった。言葉はないが、見詰められているのを知って顔を上げると、淡い明かりのなかに椎名の顔があった。

里子は再び椎名の胸に顔を当てたままきいてみる。

「うちのこと、好き？」

「もちろんだよ」

「どれくらい」

「そうだなあ……」

音の途絶えた部屋で椎名が黙った。

「すごく、いえないくらい」

「うちは海よりも深う、富士山よりも高うおす」

「僕はエベレストよりも高くさ」

「うちは、その倍……」

そこまでいって、二人は笑いだした。

だが次の瞬間、里子は急に悲しくなった。
どうしてこんな幸せな時間が長く続かないのか。楽しい時間は短かすぎて、憂鬱な時間ばかりが長すぎる。その長い苦しい時間のために、一瞬の楽しいときがあるように思えてくる。
「つろおす……」
思わずつぶやいたが、椎名は黙っていた。
おそらくこの人は、自分がどれほど愛しているか知らないのであろう。
富士山よりエベレストより高くといっても、そんなことは所詮言葉の遊びで、愛の深さなど互いに測りようはない。
しかし単純にどちらが深いかといえば、男より女のほうが深いはずである。
むろん椎名も自分を愛してくれているとは思う。少なくとも、いまの瞬間はそうだと信じることもできる。
だが思い込みの深さでは、男は女にかなうわけはない。この人と思った女の執着はこの世のすべてを焼き尽くす。だからものに憑かれ、化身となり邪淫になるのはすべて女なのだ。
「うち、こおおす」
「怖い？」
「怖いのどす」
このあとどれくらい好きになってのめりこんでいくものか。自分で自分を制御できなくなったらどうするのか、それを考えると自分がそら怖ろしく不気味になる。

「何時どす」
里子は崩れそうになる自分に鞭打ってきいてみる。
椎名が上体を浮かしてナイトテーブルについている時計を見た。
「何時だと思う」
「一時ごろ……」
遅いのを知るのが怖くて、少しオーバーにいうと、椎名が首を振った。
「いや、十二時半だよ」
初めに思ったとおりなのに、里子は三十分儲けたような気持になる。
「もうちょっと、いてよろしおすか」
「もちろん、いて欲しい」
里子はもう一度、椎名の胸を見ながらつぶやく。
「うち、あれから初めてどす。信じてくれはらへんかもしれませんけど、この前、嵐山でお会いしてから一度も……」
里子はなぜいま、急にそんなことをいい出したのかわからなかった。だが、このことだけは椎名にはっきりいっておきたいとも思う。
「しかし、それでは……」
「いやなもんはいやどす」
もともと菊雄はそれほど精力的な男ではないが、それでもときどき求めてはくる。だがそ

の都度、里子は軀の具合が悪いとか、疲れているといって避けてきた。
「わかってくれはりますか」
「……」
女は男のように、そう誰にでも軀を許すわけにはいかない。好きな人ができたら、もう他の人には一切触れられたくない。髪一本触れられただけで寒気が走る。
「うちはたった一人……」
いいかけたとき、目の前の大きな胸が迫ってきて、里子の軀はすっぽりと椎名の腕のなかにつつまれた。

里子がホテルを出たのは、それから三十分あとだった。
午前一時を過ぎた街は静まり返り、夜になってでてきた風のなかで、街灯だけが一列に並んでいる。
里子は車のシートに背を凭せたまま、闇で黒い空間となった夜の加茂川を見ていた。
椎名に逢うまでは、あれもこれも話そうと意気ごんでいた。いままで抑えていた辛さを一気にはらすつもりでいた。
だが、いざ逢ってみると、思ったことの半分どころか、十分の一もいっていない。
といって、別に話すことを忘れたわけでもない。いおうと思いながら、つい別のことに気をとられ、いまそんなことをいっても仕方がないと思ってしまう。面倒な話をして深刻にな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton